

# 幼児の創造的活動の指導 (下)

— 音楽リズムを中心として —



岡 田 鈴 代

## (四) 集団的な自由表現の発展について

二学期も半ばになりますと、幼児の活動も次第に集団的になりますので、集団でする表現的な活動の姿をつぎにおつてみたいと思います。

第一日 (十一月十四日)

公園に散歩に出かけました。赤い実を手にして遊ぶ幼児、広場をかけ回り数少ないどんぐりや、落ち葉を求める幼児、大木を見上げて「お空にとどくみたいやに」と、かかえるようにしているS子、老木の根っこをのぞいて「何かいるぞ」「まっくらな」とH、I児の会話「くまさんかわからんな、な」「ちがうに、おぼけや」などと懸命な顔つきでうなづき合っていました。そのうち、H児が先頭になって「探検ごっこしよか」「探検にいくものついておいで」と、元氣者同士が友だちを呼び合い勇んで老

木の間をかけまわっては、穴のぞきをしていました。足を高くあげて、きばってあるく姿、穴をのぞく身体つきなど、本当に何かを探検するようでした。こわごわ女児が後について行つては「キヤッ」とにげていく姿などがみられました。

この頃になると、友だち関係も成長し、遊びの内容が旺盛になりますので、教師との関係でする活動よりも幼児たちの間での活動の方が目立ってくるようです。

第二日

そこで次の日にみんなで、自分の思うままをのびのび表現するように、またその内容に五才児らしい工夫や考え方を受けとめてするような活動をさせたいと思つて、幼児の発言や行動を生かすようにして指導してみた。即ち、幼児のいろいろな会話の中から、適当なものを、幼児たちで選択させ、その言葉から感じとつたものを表現させてみることにした。次はその実践例の一部です。

ナレーション

表 現

・公園の木の葉が、赤や、黄色になつてゐるの。

・小鳥たちが喜んで遊んでゐるの。

・風さんにふかれ、て木の葉たちや、どんぐりさんも落ちてきたの。

・そこで、どんぐりたちは、かくれんぼをしたり、鬼ごっこをして遊んだの。

・椅子の上ののつて、五人、六人のグループが点々と大木を作り「ぼくもみじ」「いちょう」と両手を大きくまわして大木になる。

・手をはばたかせたり、二人手を組んでとんだり木に話をしたり、とまったりする。

・フワッとスローモーションのようにとぶ。体をまるくしてころがる。また、友だちとぶつかり一緒の方向へころがる。

・大木の椅子の間にかくれたり、ジャンケン鬼などをする。

この日は、木の葉グループと、どんぐりグループの役割交代をして遊ぶのに興味を示しリズムとしての発展をみることできまぜんでした。何か一つの経験を話しあいながら、創作することが大変むずかしいと思ひました。

### 第三日

私は何かヒントを与えることによって、並列的なグループ活動から、次第に立体的な表現がみられたらと思つて「木の葉や、どんぐりさんは、どんな遊びをしているのかしら」と話しかけまし

た。すると絵画コーナーでは、色画紙に幼児らしい園外保育での絵を描きはじめましたが、身体的表現としては、現わすことが困難なようでした。「鬼さんや、子ぐまさんが、葉っぱを頭につけてリボンでいっとるの」というM子「どんぐりが一列に並んでかけっこをしているの」とか「穴にかくれてかくれんぼしているの」など大きな頭のどんぐり坊やのかけっこの絵や、穴から兎や、くまの顔だけ出しているなど豊かな絵ができました。

また、登園と同時にままごと遊びに興じているグループもみられました。それは動物のお母さんやお姉さんになつてのピクニックごっこです。葉っぱや、木の実のごちそうをどっさりもつて、赤ちゃんをおんぶして、このピクニックは園庭にまで場を広げていきました。「ここ遊園地なんさ」「ブランコもあるの」といって、ところせましとかけまわり、お弁当をすませて部屋にもどる時は笑顔がいっぱいでした。このグループは、お弁当つくり懸命になり、のり巻きやら、サンドイッチといった調子に一時間余り遊びました。

このように、幼児たちの遊びの内容が意外な面に発展していきました。リズム的なものができずに残念でしたが、友だち同士の結びつきがかなりできて、グループでの積極的な活動が多くみられますため、幼児たちの活動を十分に発展させることに重点をおき、気ながに創造性を阻害することのないようにいたしました。それで、この日は幼児たちのグループでの遊びを進展させるこ

とど、絵画表現を中心として終ることになりました。

第四日

昨日のご馳走つくりのグループは今日も続けて遊んでいた。また園庭に線をかいて、リレーごっこをやっているグループもありました。私はこのようすから、幼児たちの考えが知らず知らず別の方にむいていくような気がした。しかしあせらず十分にこれらの遊びをさせてやろうと大切に見守ることにしました。

第五日

園外保育をきっかけとしたこの表現の展開には、いくらかあきらめていました。そして今日の幼児たちは、どんな面に興味を示してくるか、不安と期待の祈りのまじった気持で朝からそれとなくいろいろな動物のリズム曲を部屋に流しておりました。すると案外消極的な幼児がにこにこしながらそばよってきました。私は曲を小さくして、「この前行った公園たのしかったね」と聞きますと、「うんお弁当持ちの日に弁当をもって行きたいわ」とS子「兎さんやりすさんがほんとうに、おったらいいのに」、「そんなおるかな」、「どんぐりなんかあまり落ちとらんであかんわ」と自分の思ったことをそれぞれが話し出しました。

そこでたくさんのお話や素材なものの中から体の動きで表現し易いものを集まってきた幼児たちとともに選んでまとめてみようと思いました。これらの動きには伴奏をタンブリン、ピアノを用いてみました。あそびの方法は第二日目と同じです。

ナレーション	表 現
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ さあ、お弁当をもって公園にでかけるの。</li> <li>・ 木の葉やどんぐりたちが、はやくおいでーと呼んでいるの。</li> <li>・ 穴の中にいるりすさんや、兎さんをみんなで「おいでー」と呼んでるの。</li> <li>・ 高い木の上から見ている、どんぐりたちも「ぼくたちもいっしょに遊ぼう」と木から葉ちてきたの。</li> <li>・ そして、ジャンケンをして、リレーごっこをして遊んだの。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 二、三人が手を組んで走ってきたりかけっこをしながらとんでくる。</li> <li>・ 木の葉たち笑いながら手まねをする。</li> <li>・ 手を口にあてて、大きな声で呼ぶ。</li> <li>・ 「りす」がちよこちよこばしりをしながら出てくる。</li> <li>・ 兎 両手を耳にして、びくびく動かしたり、とんだりしながらくる。</li> <li>・ どんぐり どんぐり ころころ どんぐり どんぐり ころころ ころころ ころころ ころころ ころころ ころころ</li> <li>・ “と”歌いながらころがる。</li> <li>・ 二組にわかれるのに、足でジャンケンをする。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 遊びつかれたうきぎやりすたち、みんな木にもたれたり、草の上で休みました。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>注 かけっこの曲でリレーごっこをしていたが、元氣な幼児がむずむずしているのを、あくまで表現だけで終るのをさげ拍手も取り入れて、この部分を十分遊ばせた。</li> <li>・ ピアノに合わせて、だんだんしゃがんで木にもたれる。お友だちの横に並び仲良くねてしまう。</li> </ul>

小さく教師の声、

「みんな元気に遊びましたので、やさしい風さんが、木の葉のおふとんを、かぶせてくれましたよ」

この遊びには次第に他のグループの幼児も参加し、積木や椅子などもつかって、高い場をつくり、お面なども作って役割など変り合ってよく遊びました。

しかし幅のある自由な表現があまり生まれなかった原因について考えさせられるものがありました。つまり幼児たちが感動したからといって、そのことによって必ずしもよい身体表現が生まれるとは、かぎらないような気がしました。といえますのは、絵画表現の素晴らしさにくらべて微々たるものであったということですね。それをあえて教師の満足できる線まで深めていくのは、さけるべきではないかとも考えて、身体表現は、これ以上発展させることはやめてしまいました。

この実践を通して私は、幼児のある一つの活動は、全体としての幼児の活動に支えられており、これらの調和をみだすことは、かえって幼児のもっている創造性そのものをゆがめていく結果を招くのではないかということを反省しました。つまり教師の期待した活動は、もっと他の活動を十分にさせている間にいつの間にかできるときがくるということを感じて、このことについては、次にのべる一月の実践において少しは、明らかにされたような気がします。

##### (五) 総合的な表現の展開について

第一日(一月二十八日)

寒さが増し室内遊びが多くなると、ゲーム遊びと並んで人のあるのが、レコードをかけてきくことです。「先生、レコードかけるに」とディズニーの名作童話を聞いたり、物語りなどの絵本をみるのがとてもすきです。同じものを幾度も幾度もかけて喜んで聞いているグループがみられるようになりました。

なかでも「白雪姫」「バンビ」「みにくいあひるのこ」などが好きな話です。場面のようなすなども効果音楽によって、幼児たちの頭の中でひらめいているようです。(さびしい感情、静かな感情、たのしい感情)あきることなく真剣な表情で聞き入っています。話の筋も一応自分たちの話として理解できるまで聞くと、中でも好きな童話が自然ときまってくるようです。このときの幼児たちは、「みにくいあひるのこ」がすきなようでした。いつまでもいつまでもかけて簡単な会話や歌の端々を一緒にいったり歌ったりして喜んでいる姿がみられました。

〈次の日〉同じように情緒的にも安定してゆったりとした気分です。レコードに親しんでいました。そしてだれいとうなく印象の強かったこと、想像したこと、場面のようすなどを、画用紙に描きはじめました。いろいろ画面に向かって「まあ、みんなかわいいこだ」「おや！おおきなたまごだね、どうしたんだろう」「さあ、お母さんについて、およぎ方の練習をしてごらん」など語りかけ

ている幼児からは、動きのある絵ができました。そこで私は描けた絵を場面順にはってやりました。それをみているうちに曲の内容やイメージが幼児なりにわいてきたようです。そしてこれまでに六月に（小犬と時計）七月（表わら帽子）十二月（さるどかに）と三回の劇あそびをした経験が役に立ったのか、劇的な雰囲気気が盛り上ってきました。

〈三日目〉 グループ数もかなりでき積極的な話し合いの場もたれました。昨日と同じようにレコードをかけたなり、場面の設定も話し合えていました。動きをとめないながら語りかけるK子は、「先生、あひるがあるく時こうな」とおしりを出して、ヨチヨチあるいてみる。「池では水遊びしたり泳いだり、食物をみつめてその方へはしたりするよ」とY児、「口を上にして水ものむに」など表現をしながら会話がいろいろでてる。このような会話がでつくれた頃をみはからって、「みんな上手に表現したりお話したりできたでしょう。それをこんどはできるだけ自分で好きなようにふしをつけて歌ったり、動作だけでみているお友だちにわかるようにやったらどうかしら」といってみた。そして「アルビ」の散歩のできる曲をピアノで弾いてやりますと、泳いだりあるいたり楽しんでいました。そしていくらか言葉で誘導して変化のある動作をさせますとしだいに「あひる」の表現らしくなりましたが、時間なくこの日はこことで終りました。

〈四日目〉 登園してくるなり「先生あひるさんだけではおもし

ろくないから、もっとかばやわしのでてくるころもしよ」「そうね、それにレコードの通りやらなくてもいいのよ、あなたたちの好きなようにやったら」といいますと、早速いろいろ自分たちでくふうしながらやりかけました。まだ、まともはみられませんが、動作に熱が入ってきました。「かばは、だばあ、とでてくるのき」「そんなあかん」「先生かばは、どうやってなく」「そうね、先生もしらないわ、みんな考えて」と全員に相談をしました。すると「ぶくぶくわ」「水の中から顔を出すから、あっぱあっぱ」などいろいろな意見がでてきましたが、「あかん、先生下」と低い音をピアノで出して」というK子の発言に「そう、そう」とようやくまともになりました。

そこで私はドミソの和音をひきますと、「これでかばがでてくるのき」と全員納得しました。このように「わし」の部分もいろいろ話し合い、どうにかまともになりました。そして「あひる」以外の動物の出現の場面が決まりました。

〈五日目〉 昨日のところまで順をおってやってみると、何かものたりない感情が幼児たちに出てきたようです。そこでまたレコードをかけて聞くことになりました。「そうや、ぼくたちはしゃべらんでもええんや」「かあさんあひるがひよこたちにお話するよるに」「ちがう、はじめのところ」「そうね」「きれいなお池のそばの」というところとI児が指摘しました。「そんなところはどうするかしら」と相談しましたが、幼児たちには自分たちで動き

の構成のできる範囲があるようです。ここでできないと思ったとき幼児たちは困ってしまつた。そこで私は、「そうね、本当に困つたわね。ここはあなたたちができないもの、先生にもできないわ」といってまたレコードをかけてやり、表現しにくい場面の状況は、レコードの美しい曲を流すことにしました。その後は、レコードを流して幼児たちのことばで解説をすることにしました。

〈六日目〉 場面をおつてグループ単位で表現してみました。幼児のもっている表現内容だけでは、相手に意味の通じないときは、ついことばで大声を出してしまうようなことがよくみられましたが、動きや歌詞でつづるよりも幼児自らでてきたことばは大切にやり自信をつけさせてやりたいと思ひ、声の大きい小さいには、ふれないことにしました。

〈七日目〉 ストーリーも大体できてきたので、劇的雰囲気を出して楽しくさせてやりたいと思ひ、環境の整備を幼児たちとともにすることにしました。机や椅子も小道具的価値のないものは廊下に出し、最初から情景を取り入れてみました。「先生、あひるさんの家、赤にしよ」とI子がいいいます。「草むらは」「ままごとのさくに草を切りぬいてはるの」「花は」など気のついたものは製作しましたが、製作活動は案外早くに早くできました。配置などもよく相談してはったり、おいたりしました。部屋のようにすがすがり劇あそびブームになりきると、積極的に自分のしたい役割についてみんなに承認を求め、「ぼくがおとうさんあひる」「ぼくも」

というような会話がでてきました。そこで私は、あのような幼児の状況から、ある程度自分たちで決めながら、遊びを發展できそうに思ひ幼児たちに、できるだけ自由にさせることにしました。そしてその日の遊びの最後には話し合いをもつて活動をよりよく進めていくために必要なことを、みんなで考えたり、表現したりして少しずつ細かい表現にも気をつけるようにしむけました。こんな日が三日ぐらい続きました頃には、自分たちでつくつた劇といつてすっかり喜んで遊んでいました。その間には即興曲づくり、お面づくりなどもおりませたり、また役割も(小道具かかり、レコードかかりも含む)幾度も変り合つてしていました。そのうちに何の抵抗もなく、誰れがリーダーになるともなく、全員がその役になりきつて表現を楽しんでいました。

ではここに實際した幼児の活動についてまとめてみましょう。

(二場面)

第一の場面

情景のレコードを流します。しばらくして「きれいなお池のそばの、あひる」のおうちではお母さんのあひるが、かわいい玉子を五つうみましました。幼児の解説が入ります。

即興的にうたう	表	現
	かあさんあひる。 玉子のまわりを、のぞいたり、羽ばたかせたりする。	

玉子<sup>1</sup>  
 「ピーピーピー」  
 ビー おかあさん  
 玉子<sup>2</sup> 同  
 3 同  
 4 同

かあさん、とうさんあひるが交互にうたう。  
 「ふしぎだな、ふしぎだな、どうしたんだろ」

一回

全員

「はやく、はやくでてきてごらん」

玉子<sup>3</sup>

「ビ、ビ、ビおかあさん」

玉子<sup>4</sup>

「ぼくは あひるだよあひるの行列の歌」

(中田喜直作曲  
 小林純一作詞)

。小さくしゃがんでいた玉子が小さく羽ばたいてとんでみる。うれしそうにおかあさんと歌いながらそばにやる。

玉子1〜4まで順々による。

かあさんあひる

「まあみんなかわいいこだわ」

とうさんあひる

「おや一つだけまだだよ」

かあさんあひる

。のぞきながら、玉子をなでたり、あたたためる。

全員

。はやく、はやくと玉子にさわったりしてようすを眺める。

玉子<sup>5</sup>

。ゆっくり大きく伸びてから羽ばたく。

かあさんあひる

。大きく驚きの顔、両手を顔にあて、のぞき見るように、「おや、おまえはあひるかい」

かあさんあひる

。「さあみんな、おとうさんが先頭になつて、泳ぎ方を覚えるんですよ」

。並んであるいたり、池の中にとびこんで泳ぎ方をまねたりユーモラスに

みなくいあひるの子  
 「おかあさん  
 おかあさん」

する。  
 。おかあさんたちを追いかけていつては呼ぶ。おいてきばりにされて一人首を振って呼ぶ

第二の場面

レコードで効果音楽を流して、静かな場面にする。「かわいいうな、みなくいあひるの子」は、おかあさんたちにおいてきばりになりました。しかし「あひるの子」は強い子ですから泣きません。一生懸命お母さんを探しました。と解説を幼児がいう。

即興的にうたう	表	現
<p>かば          和音「ドミソ」          どうしたの、          ひとりぼっちで          みなくいあひるの子          「ぼくのかあさん          しらない」</p>	<p>かば          。重々しく両手を大きくまわし泳いででてくる。そばに寄り、なぐさめる。</p>	<p>かば          。首を左右に振って、知らないようすをする。また水の中へもぐっていく。</p>
<p>わし          和音「ドファラ」          わし          「しまった、ぼくのす          きなごちそうをにが          してしまった」</p>	<p>わし          。すばやくみなくいあひるの子を、おそいかかるうとする。</p>	<p>わし          。草陰にかくれる。小さくなってわしをみつめている。</p>

白鳥のむれ  
レコードに合わせる

かあさん白鳥  
君はだーれ、あら白  
鳥の子だわ。  
どこへ行ったの”

白鳥の子  
”ぼくまいごになった  
の”

あひるの子  
。草陰から空を見あげていると、自分  
と同じような体を見た鳥が飛んでい  
るのを見て、思い切って自分もとび  
立ちます。レコードに合わせて楽し  
くとんでいると、

かあさん白鳥  
。ふしぎそうに毛をさわったり、顔を  
のぞいたりする。

かあさん白鳥  
。「あなたは立派な白鳥の子どもです  
よ、おかあさんのそばに、しっかり  
ついていらっしやい」

白鳥の子  
。うれしい表現をいっぱいにして、お  
かあさんのまわりをとんでみる。

フィナーレは白鳥の歌をうたいました。(この歌は全部レコー  
ドからの覚えていましたので、すこしむずかしいところがあり  
ましたが半音低くして使用しました。)

1 ”ぼくの名前は、白鳥、白鳥、ぼくのお母さんは、白鳥、白  
鳥、いつも夢みてたんだ「お母さんのことやみんなのことを」

2 ”君の名前は、白鳥、白鳥、君のお母さんは白鳥、白鳥、  
「そう立派な白鳥よ、さあ遊びましよう」

最後の部分は明るく幼児の大好きなフォークダンス「ジビディ  
ジビダ」をとり入れて楽しく終りにもっていきましました。

このようにして、時には自分たちだけで、ある時は私もあひる  
のお母さんになったり、かばになったりしてともに楽しみまし  
た。このようにオペレッタふうな劇あそびとして今までと違った  
味の劇あそびの経験ができました。

この時期になると、幼児が話をつくったり、紙芝居をつくった  
りすることは、すでにいろいろなさかれてある程度の効果は予想さ  
れますが、このような方法を今まであまり試みなかっただけに不  
安な面が手伝いました。

しかし自分たちでつくった劇というよろこびが、それぞれの幼  
児にとって大きな自信になり、自分たちの中からでてきた創造性  
により、楽しく表現できるものだとわがかりました。

以上私の実践について簡単にふれてきましたが、このような実  
践は、いわゆる音楽リズムといわている領域には必ずしも含まれ  
ないかもしれません。でも、ここに紹介しました実践は、その表  
現の程度や内容がどのようなものであれ幼児たちが喜んで積極的  
にとりくんだものであるということだけでも、幼児教育において  
もっとも大切にしてやらなければならないものを、身につけたの  
ではないかと思えます。つまり幼児の成長していく過程の中で幼  
児の生活の中にあるリズムというものを積極的に表現しようとする  
ことは、豊かな人間性をつちかう上においても、創造性の芽ば  
えを育てる上においても、とても大切なものだと思うからです。

(四日市市立中部幼稚園)